やらまいかの源流 Vol.1

本田宗一郎

技術は哲学の結晶だと思っている。哲学のない技術者なんてロボットにすぎないのではないか。哲学があれば、そこから独創性も生まれてくる。

創造都市実現への原動力となる浜松の潜在能力のひとつが「やらまいか」とすれば、その源流は、先人たちの残した足跡に見ることができる。

本田宗一郎――浜松では、自動車修理工場からの出発だった。その仕事ぶりは、他社が投げ出した自動車の修理を一カ月がかりで解体、部品を作って完成させたり、トラックの荷台を油圧式の機械で傾斜させるダンプカーに改造したりと修理工場の域を逸脱した独創的なものだったという。また、当時、エンジンの中で一番難しいとされたピストンリングの研究に挑み3年の歳月をかけて完成させ、メーカー(東海精機重工業株式会社)へと転じている。戦後、無線機発電用の小型エンジンと自転車を組み合わせた簡易オートバイを開発。大衆の足となって活躍する。その後、ロングセラーとなるスーパーカブの開発を足がかりに、二輪メーカーとして国際レースへの参戦、輝かしい戦績を残す。そして、これまでの技術の蓄積をもとに四輪への進出、F1への参戦、アメリカの排ガス規制に対応する世界初の低公害CVCCエンジンの開発など、飛躍的な展開は周知のとおりである。

僕が一番スリルを感じるのは何か企画して、それが失敗した時だね。頭の中が次のアイデアで一杯になるんだ。

しかし、宗一郎の数々の成功には、同数以上の失敗があり、常に挑戦の連続だったという。彼は、アイデアを次から次へと考えた。アイデアを朝、チョークで工場の床に描くと、それを午前中に設計者が図面に起こし、午後には部品担当者が試作、夜には組み立て、テストをして翌朝、宗一郎に報告されるという超高速サイクルで失敗をやり尽くして成功したものを残していったという。この仕事のスタイルが浜松の一企業を日本から世界の企業へと短期間で成長させた。また、経営危機の原因となった4億5千万円(当時自社資本金の30倍)の工作機械の購入は、会社がつぶれても日本のために残り、働くだろうという宗一郎の意思とともに、決断された。前述のピストンリング製造で行き詰まった際は、浜松高等工業高校(現静岡大学工学部)の聴講生となり学生に交じって工学を一から学んでいる。

彼は、自分にないものを持っている。考え方は違うが、違うからこそ組む価値がある。

宗一郎の挑戦と成功に寄り添う名パートナーの存在がある。1948(昭和23)年に浜松に本田技研工業株式会社を設立した翌年から、宗一郎が社長を退任した1973(昭和48)年までの25年間を共にした藤澤武夫という人物だ。

当時、宗一郎は出会ってすぐの藤澤を常務取締役として会社に迎え、経理、販売など技術以外の部門を全権委任した。宗一郎は、自分と違う個性、才能を持っている彼の本質を見抜き、受け入れた。そして、このコンビで会社を動かし、幾多の危機を乗り越えている。

彼らを知る人は、宗一郎は常に未来を見つめ、後ろを振り向かないで進む人。反面、藤澤は過去にすべての鍵があると考える人だったという。

この二人の哲学の絶妙なバランスが、過去に例のない新しいものを創ろうというフロンティアを見いだし、数々の課題に柔軟に対応する力となったのだろう。

彼らの時代から、社会背景や価値観、産業構造などずいぶんと変化してしまったが、世界に誇れる産業技術の蓄積が浜松にはある。この底力と先人のDNAとして受け継がれた「やらまいか」をもって、柔軟に創造的に街づくりを進めていけば、新しい浜松「創造都市」の実現も可能になるだろう。

本田宗一郎(1906−1991)
磐田郡光明村(現・天竜区山東)出身。
「世界のホンダ」創業者。卓越したアイデアと不屈の精神で新たな道を拓く姿勢と人間味溢れる人となりは、「やらまいか」としてこの地、遠州で暮らす人々のDNAに受け継がれ、考え方やものづくりのよりどころとなっている。

もう一度、“やらまいか”

成功は99%の失敗に支えられた1%である。